
Angel if Beats

ゆづ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n g e l i f B e a t s

【Nコード】

N 2 8 2 5 P

【作者名】

ゆづ

【あらすじ】

俺は、死後の世界から旅立った。
皆で楽しく過ごすために・・・
明るい未来をつかむために・・・
そして、もうひとつの世界で、ゆっくりと目を覚ます。

プロローグ（前書き）

初投稿なので、
ヘタかもしれないが、
どうぞ宜しくお願いしますへへ

プロローグ

ここは死後の世界。少し前まで、死んだ世界戦線と名乗る人々がいた。

けれど、その人達は皆、この世界で「幸せ」や「生きる意味」を見つけ、

消えていった。

ここから出て行って、もう一度奏に会えるだろうか？
皆楽しく過ごせるだろうか？

たくさんの不安を抱えながらも、

俺はこの世界から消えた。

そして、次の世界で目を覚ます・・・

俺の一番の願いが、どうか・・・どうか叶いますように。

また、奏でや皆と楽しく過ごすことができますように。

道の途中

俺は歩いていた。

ある、音のするほうへ。

聞いたことのある、けれど題名も歌詞も分からない、
歌の聞こえる方へ・

歌を歌っているのは、俺と同年くらいの女の子だった。

いや、歌っているというよりは、口ずさんでいるに近い感じだ。

俺はその娘に会ったことがあるような気がした。

見とれていたのか、惹かれたのか分からないけど、
無意識に。

そう、ごくごく普通の動作をしているかのように。

肩に手を置いていた。

「え・・・？」

驚いて振り返ったその人は、とても可愛かった。

まあ、驚いたのは、こちらも同じだけど。

とにかく今は、その人にどう返事をすればいいかを考える方が先だった。

だってそうだろ？

その人は、驚いて振り返ったままこちらを見ているんだから。

出会う方は様々？

「あの・・・」

「・・・結弦？」

「へ？」

今、俺の名前を呼んだ・・・？

驚いて、間拔けな声を出した。

それからしばらく、お互いのことを目に入れていながらも、ただ立ち止まっていた。

・・・変な気分だった。不思議で、変で、けれどもすごく懐かしい。そんな気分に、完全に浸っていた。

先に我に帰ったのは相手のほうで、はっ！と目覚めたようであった。

「あの、何か御用ですか？」

冷静さを取り戻した彼女がゆっくりと口を開く。

「いや・・・とくに御用は無いのだけれど・・・」

「だけど？」

ヤバ、なんか良い返事が思いつかない・・・

こういうときは、やっぱり・・・アドリブしかないか・・・

「なんか・・・無意識に話しかけてた」

うわぁ・・・何言ってるんだ俺。すると彼女は、

「私も・・・」

私も、話しかけられたとき、何の違和感も無かった。

普通に返事を返しそうになったんです。

私達って、絶対にどこかで会ってますよね？

何か分かることがあったらおしえてくれませんか？

・・・

音無結弦君。」

間違いなく、そう言った。

もうひとつの世界

「なんで、俺の名前を知っている？」

だめだ・・・どうしても警戒してしまう。

「それは・・・」

彼女は、きちんと言葉を選んで、

「自己紹介をしてもらったから。」

と、率直に言った。

しかし・・・俺は、自己紹介どころかあったことすらないはず・・・

「いつ？」

「ずっと昔かもしれないし、ずっと先かもしれない。」

「え？」

「私も、よくは分からないんです。でも、これだけは絶対本当のこと。」

一息すって、彼女は言った。

「貴方は、私の名前を知っているはずですよ。」

知ってるはずが無い。分かりきっていたことだった。

でも不思議なことに、俺は、知らないとは言わなかった。
何故だろう。

・・・いや、答えはごく簡単だ。俺は、
俺は、この人の名前を知っている。
その名前は・・・

「奏。立華奏。」

移動

「やっぱり、名前は覚えてるんだね。」

「どういうことだ？」

「昔か未来か、私達は出会ってるんだよ。」

「覚えてないけど・・・」

しばらくの沈黙の後、奏が、

「話が聞きたい？」

と、聞いてきた。

「まあ。」

「じゃ、場所を変えましょうか。」

そう言ったかと思うと、立華はもう歩き出していた。

実にスムーズに事が進んだので、ちょっとくらい心配しても良いところなんだろうが、

いきなりの出来事に、考えるような余裕は無かった。

そんなこんなで近くのカフェらしいところに到着。

「何か頼みます？」

「そうだな。」

全くペースのつかめないまま、メニューを眺める。

『keyブレンドコーヒー』とかいうので良いか、と簡単に決めた。立華も決めていたようなので、店員を呼ぶ。

「えっと・・・keyブレンドコーヒーを一つ。
立華は？」

「ショコラケーキ生クリーム添え 一つ、お願いします。」

メニューを眺め、ニヤニヤしている立華。

・・・こんなんでいいのだろうか・・・

密かにそう思った。

記憶1（前書き）

久々に投稿です。

記憶 1

「それじゃあ、話をしていきたいと思いますか。」

「ああ、頼む。」

「じゃ、まず質問から。」

「貴方は私の名前を知っていますね？」

「ああ。」

「私の名前を知っている理由は？」

「……どこかで会っているから？」

「そう。」

「なら、私達はどこで会いましたか？」

「分からない。」

「なんだこれ。すっげー緊張するんだけど……」

「以上。うーん……覚えているのは名前だけ、かあ。」

「ゴメン」

「あ、いえ。覚えている方が変わってるんですから謝らないで下さい。」

「そういうものなのか。」

「私の場合、特別変わった立ち位置だったので、覚えてることが多いんです。」

記憶2

「俺はどんな立ち位置だったんだ？」

「重要人物だと思っていたんですけど、あんまり覚えてないところをみると・・・まあとりあえず、私の知っていることを話しますね」

「よろしくたのむ。」

「まずは私の立ち位置から。えっと・・・私は生徒会長です。いつも『天使』と呼ばれていました。」

「あの、ちょっと質問していい？」

「为什么呢ようか？」

「何故に天使？」

「理由は知りませんが、私と敵対していたグループがそう呼んでいました。」

「敵対していたグループ？」

「はい。略してSSSというらしいです。詳しくは知りませんけれど。」

「ふーん・・・」

「いつも武器みたいなものを持って私に嫌がらせしてましたよ。」

「怖い!!」

「ちなみに言うけど、音無君もその一員だからね?」

「まじかよ・・・」

不思議な世界

「ということは、俺もお前に嫌がらせとかしてたの?！」

「ええ。」

「ほんっとすみませんでした!!」

「い、いえいえ！」

嫌がらせをしていたと言っても音無君は最初の頃だけだから。」

「そーなのか?」 (安心した・・・)

「音無君は他の人とはちよつと違っていて、いつも私を心配してくれたり、優しくしてくれたり、いろいろしてくれたんです。」

(グッジョブ俺!)

「そして私達は、”何か”をやり遂げました。」

「へえ・・・」

・・・ん?

「”何か”って・・・なに?」

「ごめんなさい、そこまではさすがに・・・」

「そんな、謝らないでくれ。」

俺にはほとんど分かることなんて無いんだから。」

「ほとんど?」

「ああ。俺にも分かることは一つある。」

まあ、すごいっすらと。だけどな。」

「どんなことですか?」

「あの世界の風景だよ。」

「風景・・・」

「そ、風景。」

大きな学校とグラウンド、生徒会室に校長室、川と地下とか、俺の倒れてた階段の近くとか・・・ってあれ?」

「どうしたの?」

「階段っていうのは今思い出した。」

俺が倒れてて・・・そこにはだれかいた。」

「記憶は、たどっていけば少しずつわかってくるものだから。」

たぶん、いろいろ話を聞いたことでカケラがそろったんじゃないかしら?」

「そんなものなのか」

「そう。すごくあいまいなものなの。
だから、はなしにくかったけれど・・・わかった？」

「どうだろうなあ・・・
だいたいは掴めた気がするよ。」

「そっか。それならよかった。
もう良い時間だし、そろそろお開きにしましょうか？」

外を見ると、空は赤く染まろうとしていた。

「そうだな。
じゃあ、今度また会わないか？」

少しずつでも良い。
あの不思議な世界を解き明かしていきたい。
そう、思った。

「いいですよ。
でも日程はまだ分からないので、
メールでも送ればいいですかね？」

「オッケー。じゃ、メルアド送るよ？」

「こちらを送りますね。」

二人で携帯をカチカチやっていると、

「立華奏。」

といった。

「へ？」

「きちんと自己紹介してなかったなあ、と思って。」

「思い返してみるとそうだな。」

「だから。」

「俺は、音無結弦。弦を結ぶって書いて結弦。」

「結弦・・・ね。」

あれ？

なんだかすごく懐かしい気分だ。
あっそか。

俺は立華を呼び捨てで呼んでたんだな。

「立華、下の名前で呼んでいいか？」

提案すると、それを待っていたかのように

「貴方がそうしたいのなら、どうぞお好きに。」

と言い、続けてもうひとこと言った。

「この会話、まえにもしたね。」

俺たちは、いったいどこで出逢っていたんだろう。

不思議な物語を少しずつ辿っていく。

奏といっしょに。

学校

「ジリリリリリ!!」

目覚まし時計の音・・・

「ジリリリリリリ!!」

うるさい・・・!

しばらくは布団からでないつもりだったが、あまりのうるささにそんな気も更々なくなってしまう、結局布団を出ることとなった。

リビングへと近づくにつれ、いい香りが漂ってくる。

「今日はスクランブルエッグも作ってみたよ!」

俺が料理をみているのを知ってか知らずか、そう言ってきた。

妹の初音だ。たった一人しかいない、大切な家族。

毎日こんな風に、ご飯を作ってくれる。

ご飯を食べ終わり、いつもより少し早めに家を出た。

奏にせっかくメルアド貰ったんだし、メールしてみるべきか?・・・とか考えながら、とぼとぼと歩く。

「よ！」

「うわっ！……って、なんだ日向か。」

”なんだ” って、失礼だぞ。」

「ああ、ごめん。」

「それより、どうした？何か考えてたみたいだけど。」

「そうか？」

「やっぱ初音ちゃんのことか？相変わらずだな、シスコン？」

「うっさい。シスコンとか言うな。」

つながり

学校に着いた俺と日向は、いつものように教室のど真ん中で低級な言い合いを繰り広げていた。

「お前やっぱりシスコンだろ」

「だから違うって・・・」

今日の話題は登校時の続きで、音無シスコン疑惑だった。

「だってあんなに妹に優しくする兄貴、なかなかいないだろ」

「はぁ？ 家族なんだから当たり前だろ。」

「その考え方自体普通とは違うって」

「じゃあ普通ってなんだよ！」

「そこからわかんねえのかよ!!」

「日向はわかるのかよ!!」

こんなアホな会話もクラスにとっては日常茶飯事であり、さして気にする人はいない。

最初の頃こそある種のイベントのようだったが

毎日続けばそれはすぐに日常となってしまうものだ。

気になるからといって無闇に声をだしても巻き込まれるだけだと分

かっているので

誰も仲裁に入ったりすることはなかった。

「よ。朝からまたケンカでもしてんのか？」

そんな中、挨拶混じりに教室へ入ってきたのは同じクラスの五十嵐。このケンカをとめることのできる唯一の人物。いわゆるこの二人の親的ポジションに属する。

「あーそうだよ。こいつどうにかしてくれないか？」

音無は心底めんどくさそうに日向をあしらいながら五十嵐にすぎる。

「音無だってむきになってたくせに」

と、必死に音無の手をつかむ日向。

「ちょ。日向暑苦しい！ 手を離せ！！！」

「断る！！！」

「なにが断るだ！ 五十嵐、助けて！」

しばらく二人の会話を聞いていた五十嵐はようやく口を開き、

「まずはなにがあったか話してもらおうかな。とりあえず、日向は手を放せ。」

音無も、落ち着け。はなしはそれからだ。」

と、冷静に言った。

すると、日向はしぶしぶ手を離し、音無は一息ついた。

こうやって五十嵐になだめられるのも

また彼らの日常であって、だれも気にする人はいない。

芽生え

学校にきたらいつものごとく言い合いしていた音無と日向がいたのでとりあえず仲裁に入って事情を聴こうとしたのだが・・・

「今日学校に行くときちょっと考え事してたんだけど・・・」

「いやあ、音無が考えることといったら初音ちゃんのことかなあ。」

「何故そうなる」

「だってお前シスコンだし？」

「だからちがうって!!」

「自覚していないだけでお前はシスコンだ!」

「違うって何度言えば分かるんだよ!」

「俺はうそはついていない!!」

「はあ?!」

これだ。

お前らそんなにくだらないことでいつまでケンカするつもりだよ。全く困ったやつらだ・・・

「日向はもうだまってろ。結局どういうことだ?」

「ひど!! ばっさり俺を切り捨てやがった!」

「だから! 日向が喋りだすと話が進まないだろ!」

「そうだゝ日向はだまってるゝ」

「そんな適当にあしらわないで音無さん!!」

「さんとかつけるなよ気持悪い」

「ひど!!」

「ほら。お前が喋ると話が進まなくなるだろうが。」

「もういいよ!・・・(泣)」

「んで、音無、なにがあっただんだ?」

ちよっとぼーっとしていた音無に喋りかける。

「あ、ああ。」

何か考え事でもしていたようだ。

「朝、考え事しながら学校行ってたんだけどさ。それを見た日向が、『また初音ちゃんのことか? あいかわらずシスコンだな!』的なことを言ってきたんだよ」

「だって、おれ間違ったことは言っていないでしょ五十嵐?」

すぎるような目で言ってくる。

だが、残念ながら俺はお前達の親的ポジションなんで、許すわけにはいかないんだよな・・

「あながち間違っただけさそうだけどな・・・
でも、悪いのはお前だろ。ほら、あやまれ。」

「うう・・ごめんなさい、音無。」

「い、いや大丈夫だ。俺も、つい切れちゃってゴメン！」

音無は自分から言えるからえらいよな。
うんうん。感心感心。

「お互い様ってことでOKな？」

おれが問うと、

「OK！」

と元気な返事が返ってきた。

「そういえば、結局音無は何を考えてたんだ？」

「え?!」

俺が聞くと、ビクッと肩を震わせた。

「えと・・・その・・・」

「？」

「俺・・・恋しちゃったかもしれない・・・」

「・・・は？」

小さなその声に、二人、驚きを覚えた。
それもそのはず。

音無は、あまり女子とかかわることがなかった、
というより、関わりようとしたことはなかったのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2825p/>

Angel if Beats

2011年6月24日22時50分発行